三つの金のりんご　スイス

昔むかし、あるところに、貧しい夫婦がいて、九年間に九人の子どもをさずかりました。夫婦は、このおおぜいの子どもたちをどうやって養ったらいいか、とほうに暮れてしまいました。そこで、九歳になる一番上の男の子を家から出すことにしました。

「おまえ、何とかひとりで食べて行っておくれ」と、母親はいいました。男の子は泣きましたが、さっさと家を追い出されてしまいました。

男の子は、歩いているうちに、見知らぬ土地に迷いこんでしまいました。あたりには、家一軒ありません。そのとき、白い馬にひかれたりっぱな馬車が走ってくるのが見えました。馬車には、真っ白な服を着た大きな女の人が乗っていました。

男の子は、馬車をとめて、

「道に迷って困っているんです。どうか、乗せていただけませんか」とたのみました。

女の人は、承知して、男の子を馬車に乗せて自分の屋敷に連れていってくれました。そして、

「好きなだけ、ここで暮らしなさい」といいました。

屋敷では、男の子は、ほしいものはなんでももらえました。食べ物も飲み物も何ひとつ不自由しませんでした。女の人は、屋敷のすべての部屋のかぎを男の子に渡して、いいました。

「あなたは、どの部屋でも自由にのぞいてかまいません。ただ、ひとつだけ、一番奥の部屋だけは、けっして見てはいけませんよ」

男の子は、あちらこちらの部屋を見て回って、何事もなく暮らしました。けれどもそのうち、見てはいけないという部屋を開けてみたくてたまらなくなりました。

とうとうある日、男の子は、一番奥の部屋のかぎを開けてみました。部屋に一歩入ったとたん、とびらがかってに、後ろでバタンと閉まりました。男の子は閉じこめられてしまいました。

部屋の中に目を向けると、四隅に人間の死体がぶら下げられていました。

驚く間もなく、どこからともなく女の人が現れて、

「おまえは、いいつけを守らなかったね。だから、罰として、ここにぶら下がっている人たちと同じ運命をあたえよう」といいました。

男の子は、ひざまずいて、
「許してください」と一生懸命頼みました。すると、女の人は、
「じゃあ、今度だけは許してあげよう。でも、もう決してこの部屋に入ってはいけないよ。もしこんど入ったら、命をもらうからね」といいました。

それからしばらくして、男の子は、また、一番奥の部屋をのぞいてみたくなりました。そこで、とびらを開けて中に入ると、かってに閉まらないように、薪を一本、とびらとしきいの間にはさみこみました。ところが、中に入って手を離したとたん、とびらはバタンと閉まって、薪は半分におれてしまいました。男の子は、また閉じこめられてしまいました。

男の子は、あわてて、出られそうな所はないかと部屋の中を見まわしました。すると、小さなとびらが見つかりました。そっと押してみると、そこは馬小屋でした。馬小屋に、りっぱな馬とらばとろばが一頭ずついました。男の子は、
「これはきれいな馬だ。これはきれいならばだ。これはきれいなろばだ」といいながら、一頭、一頭、背中をなでてやりました。すると、馬が、
「そんなことはいわないでくれ。おれたちは、普通の動物ではなくて人間なんだ。あの女のまほうでこんなすがたにされてしまったんだ」といいました。そして、
「おれがおまえを助けてやろう。おれのたてがみを三本ぬいて失くさないように持っているんだ。何か困ったことがあれば、『わが馬バイヤルトのたてがみの名において』といいさえすれば、かならず望みがかなえられる。それから、この大きな麦わら帽子をかぶって、髪の毛が一本も見えないようにするんだ。さあ、薪とおけと、ブラシをやるから、これを持ってすぐに逃げ出せ」といいました。

男の子は、お礼をいうと、帽子をかぶり、薪とおけとブラシを持って、馬小屋から外へ逃げ出しました。

走りながら、ふとふり返ってみると、女の人が、追いかけてくるのが見えました。男の子は、馬からもらった薪を地面に投げつけていいました。
「わが馬バイヤルトのたてがみの名において願う、あいつとぼくのあいだに大きな山がそびえるように！」

そのとたん、後ろにとてつもなく大きな山がそびえたちました。

ところが、しばらくすると、また女の人が追いかけてきました。男の子は、おけを地

面に投げつけていいました。

「わが馬バイヤルトのたてがみの名において願う、あいつとぼくのあいだに大きな海ができるように！」

たちまち、後ろにとてつもなく大きな海が現れました。

ところが、女の人は、また追いついてきました。男の子は、ブラシを投げて、

「わが馬バイヤルトのたてがみの名において願う、あいつとぼくのあいだに大きな森ができるように！」

たちまち、後ろに大きな森が広がりました。

また女の人が追いついてきたとき、男の子は、もう投げるものは何もありませんでした。そのとき、神聖な教会が見えました。男の子は、すぐさまそこに飛びこみました。女の人はもう何も手出しができず、悔しがりながら帰っていきました。

やがて男の子は、ある王さまの国にやって来ました。男の子は、お城の庭師として働くことになりました。王さまは、男の子に命令していいました。

「三日ののち、わしの一番上の娘が結婚することになっている。結婚式までに、城の庭をわしの願い通りに美しく作りかえるのだ」

男の子は、

「承知しました。ご希望通りにいたしましょう」と答えました。ところが、すぐに仕事にとりかかろうとせず、次の日になっても散歩ばかりしていました。王さまは、男の子を呼びつけて、

「明日の晩には完成していなくてはならんのだぞ。一刻もぐずぐずしていられないと思うが、どうだ」といいました。男の子は、

「心配ご無用。すべて王さまのご希望通りに作りますよ」といいました。

つぎの朝になっても、男の子は働こうとしません。王さまは、真っ赤になって怒りました。男の子は、

「心配ご無用。日が暮れるまでにすべてやってみせます」といいました。

日が暮れる十分前、男の子は、庭の真ん中でさけびました。

「わが馬バイヤルトのたてがみの名において願う。王の庭が、王の望み通りになるように」

そのとたん、庭はすばらしく美しく変わりました。それは、すっかり王さまの気に入

りました。

やがて、王さまの二番目のお姫さまも結婚しました。

あるとき、末のお姫さまが、庭を散歩していて、庭師として働いている男の子を見ました。男の子の大きな麦わら帽子の下から、金色の髪が一本のぞいていました。末のお姫さまは、それを見たとたん、男の子を好きになってしまいました。

しばらくして、王さまは、末のお姫さまをある国の王子と結婚させようと思いました。

ところが、お姫さまは、

「うちの庭師以外の人とは結婚しません」といいはりました。お姫さまの決心はかたく、王さまは、あきらめて、とうとうお姫さまと庭師の男の子を結婚させました。

やがて、王さまは、娘の夫たちからひとりを選んで、王の位をゆずろうと考えました。そこで、王さまは、三人の夫たちに、金のりんごをひとつずつ与えて、

「このりんごを、一番よく守り、一番よく活かした者に王の位をあたえる」といいました。

ところが、まもなく、王さまは、戦争にまきこまれました。王さまは、年を取っていたので、かわりに、娘の夫たちを戦場に送り出しました。

上のふたりの夫たちは、特別りっぱな馬に乗って出かけました。男の子は、馬小屋じゅうで一番みずぼらしい馬を選びました。そして、上のふたりの後について行きました。ふたりの馬はみるみるうちに水平線に消えました。男の子は、ようやく戦場に着くと、ひとこと、

「わが馬バイヤルトのたてがみの名において願う。敵は壊滅せよ！」といいました。たちまち、敵の兵たちは、先を争って逃げ去りました。

上のふたりは、急いで馬を走らせてお城に帰り、王さまに、

「わたしたちが、敵を壊滅させました」と、勝利の報告をしました。王さまは、それを信じました。

それからまもなく、王さまが、病気になりました。お医者は、

「この病気は、最も大きくて最も恐ろしいへびの肉を食べなければ治りません」といいました。娘の夫たちは、ただちに狩りに出かけました。上のふたりは、特別りっぱな馬に乗り、男の子は、一番みすぼらしい馬に乗っていきました。

三人は、長いことあちこち探しましたが、いっこうにへびは見つかりません。上のふ

たりは、あきらめて帰ろうとしました。そのとき、男の子が唱(とな)えました。

「わが馬バイヤルトのたてがみの名において願う。あらゆるへびのうちの最も大きなるものよ、わが足もとに、死して横たわれ！」

そのとたん、最も大きくて最も恐ろしいへびが現れて、男の子の前で死んでしまいました。

　上のふたりは、男の子に、

「このへびは、自分たちがつかまえたことにしたい」といいました。男の子は、

「じゃあ、きみたちの金のりんごをぼくにくれたら、へびをやってもいいよ」といいました。ふたりは、金のりんごと交換(こうかん)に、へびを持ってお城に帰りました。王さまは、へびの肉を食べると、たちまち元気になりました。

　それからしばらくして、王さまは、また病気になりました。お医者は、

「今度は、最も大きく最も恐ろしいわしの肉を食べなければ治りません」といいました。娘の夫たちは、さっそく狩りに出かけました。上のふたりは、特別りっぱな馬に乗り、男の子は、一番みすぼらしい馬に乗っていきました。

　長いことあちこち探したあげく、上のふたりが、あきらめて帰ろうとしたとき、男の子が唱えました。

「わが馬バイヤルトのたてがみの名において願う。あらゆるわしのうちの最も大きなるものよ、わが足もとに、死して横たわれ！」

そのとたん、最も大きくて最も恐ろしいわしが、男の子の前に落ちてきました。

　上のふたりは、

「このわしは、自分たちがつかまえたことにしたい」といいました。男の子は、

「じゃあ、君たちのおしりを、きりでつかせてよ」といいました。ふたりは、痛(いた)いのをがまんしておしりをつかせてやりました。

　元気になった王さまは、いよいよ、だれに王の位をゆずるか決めることにしました。

「みな、金のりんごを持って城に集まれ」と、王さまは命令しました。

　上のふたりは、にせものの金のりんごを持ってきました。男の子は、金のりんごを三つさしだしました。金のりんごには王のしるしがつけてあったので、上のふたりのりんごがにせものであることがすぐにわかりました。王さまは、どうしてこういうことになったのかとたずねました。男の子は、

「ぼくがとったへびと交換したからです」と答えました。それから、戦場で敵を打ち負かしたのも、わしをつかまえたのも自分だと説明しました。王さまが上のふたりのズボンをぬがせると、ふたりのおしりに、きりでつけた三角形の傷（きず）あとがありました。それが証拠（しょうこ）でした。

王さまは、男の子の知恵（ちえ）と勇気（ゆうき）に感心しました。そして、王の位をつがせることにしました。

男の子の麦わら帽子をぬがせると、すばらしい金の髪があらわれました。王さまは、末のお姫さまの夫選びに、なるほどと感心しましたとさ。

おしまい

村上郁再話

資料『世界の民話1ドイツ・スイス』小澤俊夫編訳／ぎょうせい